

音の散歩路

～日本の四季の音～

桐朋学園大学名誉教授

一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団 音楽振興部門審査委員

西原 稔



近年、とみに気候変動が大きな世界的な話題になっている。そういえば、これまでにない豪雨に見舞われ、夏の気温は一昔前よりも一段と高くなっているようである。北海道で南の地域の魚が獲れ、サンゴが死滅してきているというのも地球温暖化の現象とされている。

春夏秋冬をどのように過ごすのかということ考えた場合、「音」のイメージが少なからず影響している。四季の音という場合、風の音もさることながら、鳥や虫の鳴き声などの音が私たちの四季の感覚に大きく関わっている。

季節の音についてはすでに平安時代に清少納言が「枕草子」でさまざまに語っている。とくに「冬」は、朝早くに炭をおこして通っていくのがよい、と書かれている。火鉢におこした炭を入れて女官たちが慌ただしく廊下をかけていく足音が聞こえてきそうである。

松虫の声は有名であるが、江戸時代には「聴蟬」というたしなみが武士の間で行われていた。林の中に腰を掛けてセミの鳴いている声を嗜むという趣味であるが、虫の声を愛するというのは日本独特かもしれない。芭蕉の俳句にも歌われているように、蟬の声は夏の風物詩で、アラゼミやミンミンゼミの鳴き声はまさに岩に染み入るかのようである。ヒグラシが鳴くと、筆者は夏の終わりを感ずる。夕方になると鳴くそ

の声はどこか寂しそうで、夏の終わりを告げているかのようである。

イタリアの四季 ヴィヴァルディの描く「四季」

ヨーロッパや北国のロシアは、日本とは気候が全く異なり、四季の感覚も違っている。ヴィヴァルディの名作「四季」ではそれぞれの季節の情景が、作品に添えて詩で書かれている。「春」の第1楽章では、小鳥のさえずり、小川のせせらぎ、優しい風、春を告げる雷鳴が、第2楽章では牧草地の花、枝のがさがさという音、第3楽章ではバグパイプとニンフと羊飼いが記されている。「夏」の第1楽章ではかんかんと照りつける太陽、カッコウやキジバトのさえずりが、第2楽章では稲妻と雷鳴、ブヨとハエの羽音、第3楽章では雷鳴と雹が記されている。「秋」の第1楽章では収穫後にワインを飲んで大騒ぎする情景が描かれ、第2楽章では人々は酔いつぶれる。第3楽章では狩人たちがホルンを手に、猟犬を従えて狩に出る。「冬」の第1楽章は寒さで震え、歯が鳴り、第2楽章では外では大雨が降り、屋内の暖炉で休息し、第3楽章では人々は氷の上を歩き、北風が舞う。

ヴィヴァルディの描いた四季はイタリアの春夏秋冬である。この詩を見るとバロック時代の人々も四季を音で感じ取っていたことが分か

る。「春」は小川のせせらぎと小鳥のさえずりに春を見出だしている。この詩では雷鳴が多く記されているが、イタリアでは気候の変化が大きいのであろうか。初夏から8月にかけてアフリカから乾いた熱い風が吹き込み、イタリアは非常に高温に苛まれるが、それが「夏」に描かれている。

ロシアの四季 チャイコフスキーの描く「四季」

では同じく四季にちなんで作曲したロシアの作曲家チャイコフスキーのピアノ作品集「四季」はどのように1年を描いたのであろうか。チャイコフスキーは月刊雑誌「ヌーヴェリスト」に12か月を題材にした作品を作曲し、各作品には詩が添えられた。1月「炉端にて」はプーシキンの詩で「夜が薄明りの中で静かな喜びをつつむ」と語る。2月「謝肉祭」はヴィアゼムスキーの詩で、「間もなく謝肉祭のにぎやかなお祭りさわぎが始まる」。3月「ひばりの歌」はマイコフの詩で、「春のひばりの歌が明るく青い深みに響き渡る」と記し、ヒバリの鳴き声に春の始まりを感じ取っている。4月「松雪草」もマイコフの詩で、「つもった雪を通してこんなにも清らかな松雪草が輝いている」と、雪の中に咲いた松雪草に春を感じている。5月「5月の夜」はフィエートの詩で、「私は真夜中の国に感謝する。何と新鮮で澄んでいることだろう、この5月は」と白夜の国ロシアにやっと光が差

し込んできた喜びが書かれている。6月「舟歌」はプレスチャーエフの詩で、浜辺に足を愛撫する波を描いている。

7月「刈り入れの歌」はコルツォフの詩で、収穫の喜びが歌われ、「風よ、南から吹いてくれ」と暖かさへの感謝が語られる。8月「取り入れ」もコルツォフの詩で、穀物を刈って、一晩中それを運ぶ馬車のきしむ音が聞こえてくる。9月「狩の歌」はプーシキンの詩で、角笛がなり、猟犬が飛び跳ねている。10月「秋の歌」はトルストイの詩で、金色になった葉が落ち、林の中をゆっくりと風に運ばれていく様を歌う。11月「トロイカ」はネクラーフの詩で、トロイカで去った人を思う。そして12月「クリスマス」はシュコフスキーの詩で、少女たちが未来を占うためにクリスマスの日に靴を門の前に投げる様を描いている。

冬ともなると極寒の「真夜中の国」ロシアでは四季にたいする人々の印象は、ヴィヴィルディとは大きく異なっている。4月はまだ一面雪に覆われ、そのなかで咲く松雪草に春を感じている。ひばりが鳴くと、人々はやがて春が到来することを感じるのであろう。

ドイツの四季 シューマンの「子供のアルバム」に描かれた四季

シューマンの「子供のアルバム」はもともと彼の長女マリーの成長日記として作曲が開始さ

れた作品集で、その過程でシューマンは四季を取り入れた曲集へと構想を拡大し、この曲集は四季と娘と息子の日常的な出来事を題材にして作曲されている。日本よりも緯度の高いドイツでは真の春の到来は5月である。それはシューマンの歌曲集「詩人の恋」の第1曲「美しい5月に」によく表されている。

この曲集で四季や自然を扱った作品としては、第10曲「楽しき農夫」、第13曲「五月、愛する五月」、第15曲「春の歌」、第18曲「収穫する人の歌」、第20曲「田舎風の歌」、第24曲「収穫の歌」、第33曲「葡萄摘みの歌」、第38曲「冬の歌1」、第39曲「冬の歌2」などがあるが、これは四季を題材とした曲集の構想を背景としている。

この作品の初版の楽譜の表紙画は四隅が春夏秋冬を題材にした絵が描かれており、表紙画の左上は草花を摘んでいる情景で「春」を表し、左下は4人子供たちがブドウを摘んでいる。右上は借り入れの手伝いをする子供たちが描かれ、右下はお爺さんとお婆さんのひざ元で娘が人形と遊んでいる。これはこの曲集の「冬の季節1」「冬の季節2」に反映している。

私たちの生活の中から音の原風景がしだいに失われているのかもしれない。物売りの人の声や歌が消えて久しい。都会の中ではさまざまな虫の大合唱を望むのは難しい。そういえば今年は蝉の声をあまり耳にしなかった。それはセミの羽化のあたり年ではなかったせいかもしれないが、減少しているのかもしれない。私の少年時代の思い出にあるのは、初秋になると空一面が真っ赤になるほど群舞するアカトンボであるが、私の住む郊外の町でもアカトンボはめったに目にしない。古くは日本のことを「秋津島」とよんだが、これはトンボの国という意味である。またモダンな家屋の建設によって雀の住処が奪われ、その数が減少しているという。

虫の羽音や鳥の鳴き声、小川のせせらぎが作曲家に作品創造の示唆を提供し、数々の名作が生み出されてきた。そのことを考えると、四季の感覚が失われ、気候変動で四季そのものが変貌してしまうとすると、それが私たちの生活や芸術家の創造にも大きな影響を及ぼすのかもしれない。